学びやタイムスリップ

⑪ 院内学級から養護学校へ（昭和時代）

卓球バレーで交流も

京都市内における病弱児童・生徒のための特別支援教育は、1952（昭和27）年に小児結核保養所として創設された京都市桃陽学園（伏見区、現桃陽総合支援学校）に、創設当初から藤ノ森小の教員が、57年からは桃山中の教員が派遣され、教育にあたったことが始まりとされます。

58年10月、桃陽学園の学級が正式に藤ノ森小・桃山中の特殊学級となり、児童・生徒の学籍を両校に置くことになりました。

桃陽学園には、いわゆる「ぜんそく持ち」の児童・生徒も通学していました。当時の生徒作文（写真①）からは、ぜんそくと闘いながらも通学する心境がうかがえます。72、73年には、病院内の分教室として、国立京都病院（現京都医療センター）内に小学部・中学部が開設されました。

74年、ついに桃陽学園の特殊学級が市立呉竹養護学校桃陽分校となり、79年には桃陽養護学校として独立発足しました。新校舎（現校舎）への物品運搬は、保護者と教員、運動可能な児童・生徒によって、文字通り「みんなの力」で進められました。

一方、70年には宇多野病院（右京区）内に筋ジストロフィー児学級として、御室小特殊学級が開設され、翌年には双ケ丘中特殊学級が開設されました。これらの特殊学級は、75年に呉竹養護学校鳴滝分校（現鳴滝総合支援学校）となります。2年後には鳴滝養護学校として独立、同時に高等部を設置しました。

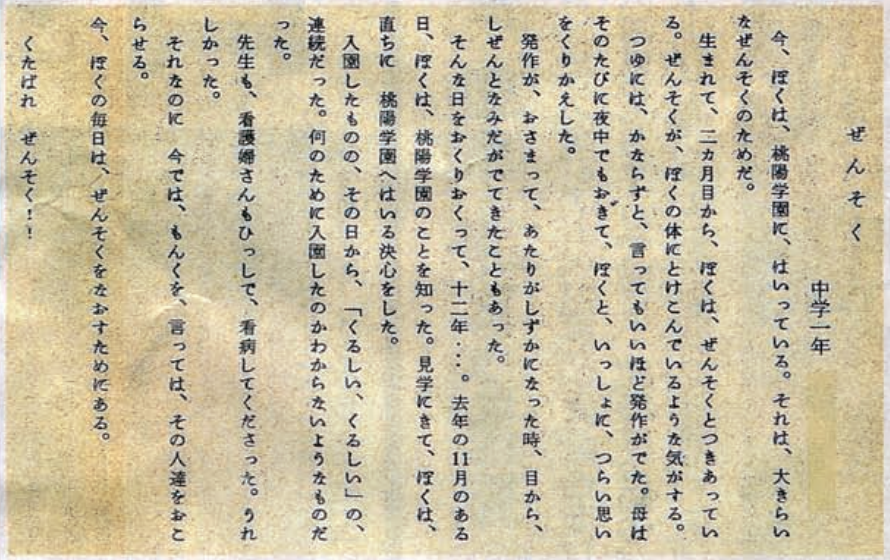
写真②は、地元の双ケ丘中生との交流会における、卓球バレーの様子です。卓球バレーは、74年の第5回近畿筋ジストロフィー症児交歓会スポーツ交流会で実施されて以降、鳴滝校が競技発展の中心となりました。現在、鳴滝校前には、その功績をたたえる記念碑が設置されています。

「交流」という言葉が公的に使用されたのは、78年の教育課程審議会答申が初めてとされますが、鳴滝校の交流会はそれ以前から行われていたのです。

（京都市学校歴史博物館学芸員　和崎光太郎）

◇

今回紹介した資料は、学校歴史博物館（下京区）で開催中の企画展「京都における特別支援教育のあゆみ」で展示しています（29日まで、水曜休館）。



ぜんそく

中学二年

今、ぼくは、桃陽学園に、はいっている。それは、大きらいなぜんそくのためだ。

生まれて、二カ月目から、ぼくは、ぜんそくとつきあっている。ぜんそくが、ぼくの体にとけこんでいるような気がする。

つゆには、かならずと、言ってもいいほど発作がでた。母はそのたびに夜中でもおきて、ぼくと、いっしょに、つらい思いをくりかえした。

発作が、おさまって、あたりがしずかになった時、目から、しぜんとなみだがでてきたこともあった。

そんな日をおくりおくって、十二年…。去年の11月のある日、ぼくは、桃陽学園のことを知った。見学にきて、ぼくは、直ちに　桃陽学園へはいる決心をした。

入園したものの、その日から、「くるしい、くるしい」の、連続だった。何のために入園したのかわからないようなものだった。

先生も、看護婦さんもひっしで、看病してくださった。うれしかった。

それなのに　今では、もんくを、言っては、その人達をおこらせる。

今、ぼくの毎日は、ぜんそくをなおすためにある。

くたばれ　ぜんそく！！

写真1、作文「ぜんそく」（京都市桃陽学園『回遊路　昭和45年度』より。生徒氏名は伏せてあります）

写真2、交流会で卓球バレーを楽しむ子どもたち（1978年、鳴滝校）